紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る

─ダハシュール北遺跡第25次調査(2018)─

矢澤 健 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授 吉村 作治 東日本国際大学学長・教授

Investigating the Transition of Egyptian Burial Practices in the Second Millennium B.C.: The 25th Season of Dahshur North Project, 2018

YAZAWA, Ken Visiting Associate Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashi Nippon International University YOSHIMURA, Sakuji President/Professor, Higashi Nippon International University

1. はじめに

ダハシュール北遺跡はこれまでに「イパイ」、「パシェドゥ」、「夕」という人物のトゥーム・チャペルとその周囲の発掘調査が行われてきた。当初は新王国時代(紀元前16~11世紀)の墓の存在が際立っていたが、2005年以降「夕」のトゥーム・チャペル周辺から中王国時代(紀元前21~17世紀)の墓が多数発見され、中王国時代にも墓地として利用されていたことが明らかになった。

紀元前2千年紀にあたる中王国時代と新王国時代では、葬制の様々な面で違いが見られ、この時期に古代エジプト文明史の重要な転換があったと推測される。こうした変化の性格を明らかにするために、2014年度からは日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(A)「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」(研究代表者:吉村作治)の一環として、ダハシュール北遺跡の研究が実施されている。これまでの調査から、遺跡の発掘地点によって墓の時期や特徴が異なることが指摘されていた。そのため2015年以降は遺跡全体の年代幅や埋葬習慣の変遷過程を把握する目的で、既調査区の間や、離れた地点に新たな調査区を設定して発掘が進められている。

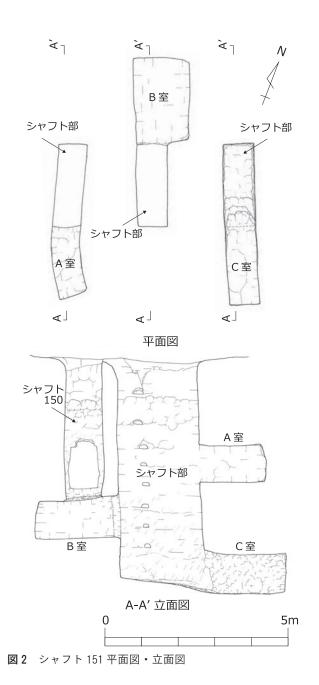
本遺跡で発掘が許可された範囲は鉄条網で囲われており、第25次調査ではその最北端に調査区を設定した(図1)。調査区は南北 $10\,\mathrm{m}$ 、東西 $20\,\mathrm{m}$ の範囲で、8基のシャフト墓が発見された。今期はこの内5基を完掘し、4基(シャフト151、152、153、155)が中王国時代、1基(シャフト150)が新王国時代の遺構であることが判明した。本稿ではその成果の概要について報

告する。

2. 中王国時代の墓

これまでに本遺跡で発見された中王国時代の墓はシャフト(竪坑)開口部平面が南北方向に長い矩形を呈し、南側または北側に埋葬室が掘削されるか、あるいはシャフトの底部に遺体が安置される形式であり、今期出土した遺構もこの傾向に当てはまる。本稿では最も興味深い成果が得られたシャフト 151 に焦点を置く。シャフト 151 は深さ 6.1 m で、南側に上下 2 つの埋

図1 ダハシュール北遺跡全体と第25次調査区



葬室があり、北側に1つ埋葬室が作られていた(図2)。 最上段の南側にあるA室は奥行1.9 m、幅0.9 m、天井高1.0 mであり平面は長方形に近いがやや湾曲している。中段の北側にあるB室は奥行2.3 m、最大幅1.6 m、天井高1.1 mで、東側に部屋が拡張されていた。B室の天井は隣接するシャフト150のシャフト部に接しており、シャフト150から砂やタフラ(岩盤の掘削排土)が流れ込んでいた。最下段の南側にあるC室は奥行2.1 m、幅0.8 m、天井高1.1 mである。埋葬室は全て盗掘を受けており、ミイラマスクあるいは人型木棺の一部と考えられる眼の象嵌(図3.1、シャフト部出土)やプラスター製の耳(図3.2、C室出土)、彩色や碑文が書かれたプラスターの断片(図3.3~3.5、C 室出土)、が発見された。B室からは木棺の底部と考えられる断片が発見されたが、残存状態は極めて悪く、全体像は不明瞭だった。

シャフト 151 から発見された土器の主な器形を図4に示した。図4.19~4.24 は半球形の碗であり、時代が新しくなるにつれ浅く開いた器形から深くやや閉じた器形に変化することが、既往の研究で明らかにされている。図4.19~4.21 はA室から出土した断片とA室よりやや下のシャフト部から出土した断片で構成されており、比較的深い輪郭を持つ。一方図4.23、4.24はB室、およびC室やシャフト下部の堆積から出土した断片によって構成され、比較的浅い輪郭を有する。したがって、B、C室出土断片を含む碗の方が、A室出土断片を含む碗よりも古い様相を示す。その他の器形についても、概ね下部が古く、上部が新しいという傾向が認められた。

土器の垂直方向の分布に見られる新旧の関係は、 シャフト 151 の利用と拡張の歴史について示唆を与え ている。おそらく最初にC室が掘削され、埋葬が行 われた後、一旦竪坑は埋められたと推測される。過去 に本遺跡で発見された未盗掘墓の例から、埋葬後に シャフトがタフラで埋められていたことは明らかであ り、盗掘を受けた墓のシャフト下部にしばしばタフラ が残存していることがこれを裏付けている。次にこの シャフトへの追葬が必要になった際、シャフト部のタ フラは一旦取り除かれた。この際℃室の撹乱を避け るためおそらくC室前のタフラは残され、新たな埋 葬室(B室)は一段高い反対側(北側)に掘削された。追 葬後再びシャフトは埋め戻され、一定の期間が過ぎた 後再び墓は開けられ、今度はB室を荒らさないよう に反対側(南側)のさらに一段高いレベルに A 室が作 られたと推測される。南北交互に部屋が作られている こと、そしてC室天井からB室床面までの比高差と、 B室天井から A室床面までの比高差が約40cmでほ ぼ同一であることも、こうした配置が偶然ではなく、 追葬によって以前の被葬者の埋葬を荒らさないように するための工夫と見受けられる。

シャフト 151 のように複数の埋葬室を持つシャフト 墓はエジプト各地で数多く報告されているが、出土遺物や遺構の特徴からその利用と拡張の歴史について考察された例は稀であり、重要な成果と考えられる。被葬者の関係や、B、C室と A室の年代幅の意味については今後の検討課題である。

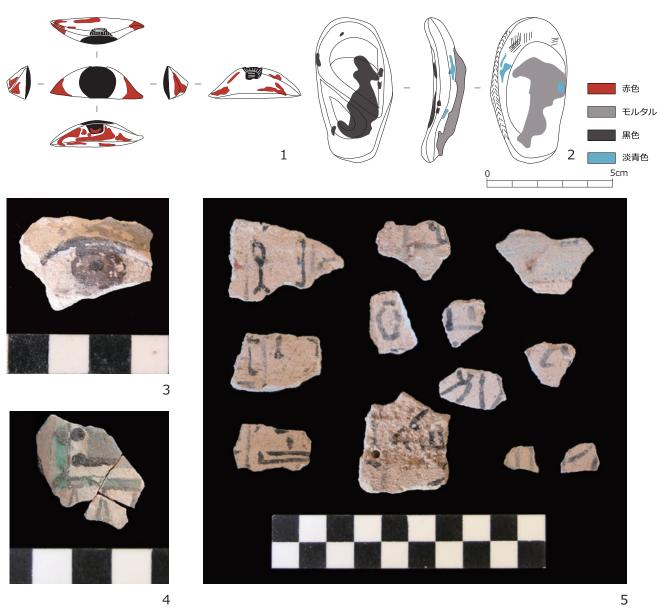


図3 シャフト 151 出土遺物

3. 新王国時代の墓

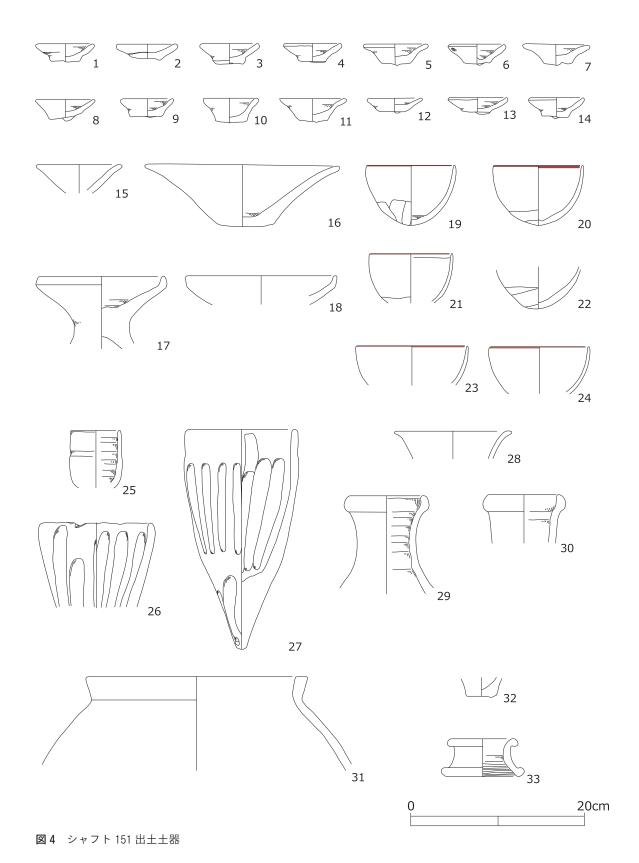
今期発見された新王国時代の墓はシャフト 150 のみ である。シャフト開口部平面が東西方向に長い矩形を 呈し、シャフト部の深さは3.9mで底部から東西に矩 形の部屋が設けられている。シャフト底部は前述の シャフト 151B 室の天井に接しているため、大部分が 失われている(図5)。東側のA室(南北2.2m、東西 2.5 m、天井高 1.1 m) と西側の B 室(南北 2.0 m、東西 2.7 m、天井高 1.0 m) はどちらも整形が行われ、埋葬 室として完成していたように見受けられるが、出土遺 物は数点の土器のみであり、副葬品や人骨は一切見ら れなかった。

図 6.1 の土器は断面が台形で底部に穿孔がある「フ

ラワーポット(Flowerpot)」と呼ばれる器形で、第18 王朝初期から中期に類例が認められる。この土器が遺 構の造営年代を示しているならば、シャフト150は本 遺跡の新王国時代の墓の中で最古級に位置付けられる ことになる。

4. おわりに

シャフト 151 の成果は中王国時代の墓利用について 有益な示唆を与えるものであった。しかし一方で、今 期の結果はこれまでの本遺跡の中王国時代における墓 地形成過程に一定の再考を促すものである。これまで は中王国時代の墓は東側が最も古く、西側に最も新し い年代の墓が多いため、東から西への漸次的な発展が 想定されていた。しかし、シャフト 151 の最下部の埋



葬と最上部の埋葬には一定の時期幅があることが明らかであり、面的な発展とはベクトルの異なる変遷を遂げていたことになる。本遺跡の中王国時代の墓で3つの部屋を持つ例は今回が初出だが、2つの部屋を持つ墓はこれまでにも複数発見されていた。墓地形成過程

を検討する上で、こうした複数の部屋を持つ墓の利用 の年代幅についても、可能な限り見ていく必要がある。

新王国時代の墓は今回シャフト 150 のみであったが、 第 18 王朝初期から中期に年代づけられる土器が出土 するなど、本遺跡の新王国時代では最古級の遺構であ

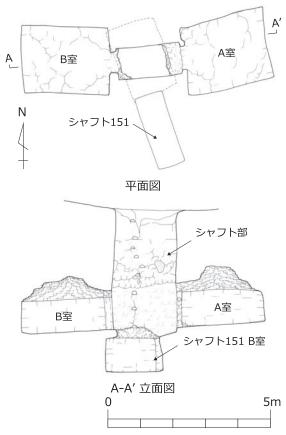


図5 シャフト 150 平面図・立面図

る可能性が示された。しかし、埋葬の痕跡がほとんど 見られず、この時期に墓として実際に利用されたのか どうか判別し難い。周辺の発掘調査を進め、資料を補 足することが今後望まれる。

本研究は日本学術振興会基盤研究(A)「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」(課題番号 26257010)と若手研究(B)「図像・碑文資料と考古遺物の比較による古代エジプトの供物奉献儀礼の研究」(課題番号 16K16943)の助成を受けて実施された。

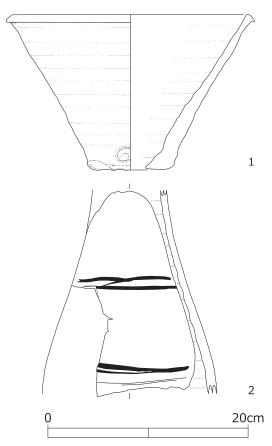


図6 シャフト 150 出土土器

■参考文献

- Baba, M. and K. Yazawa 2015 Burial Assemblage of the Late Middle Kingdom shaft-tombs in Dahshur North. In W. Grajetzki and G. Miniaci (eds.), The World of Middle Kingdom Egypt, Middle Kingdom Studies 1, 1–24, London, Golden House Publications.
- · Yoshimura, S., K. Yazawa, J. Kondo, H. Kashiwagi, S. Yamazaki, N. Ishizaki and M. Arimura 2019 Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fifth Season, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association* 7, 35–75.
- ・矢澤健・吉村作治 2016「エジプト・ダハシュール北遺跡の中 王国時代のシャフト墓について:遺構の形状・規模・分布の分 析」『オリエント』58(2)号 196-210頁。
- ・吉村作治・矢澤健・近藤二郎・柏木裕之・山崎世理愛・石崎 野々花・有村元春 2018「エジプト ダハシュール北遺跡調査 報告―第24次調査―」『エジプト学研究』24号 113-157頁。